

「怒れる若者たち」再考

楠田 真

日本大学大学院総合社会情報研究科

The “Angry Young Men” Revisited

KUSUDA Makoto

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The “Angry Young Men” is a term applied to young working class and lower middle class writers of the 1950s in Britain. Their anti-heroic protagonists share certain rebellious and critical attitudes against the Establishment. The aim of this paper is to revisit the socio-cultural meaning of the “Angry Young Men” by re-reading a representative number of their masterpieces in the context of their historical and social background and literary criticism.

1.はじめに

「怒れる若者たち」(Angry Young Men)は、1950年代のイギリスに出現した作家群に与えられた呼称である¹。一般的には、ジョン・ウェイン(John Wain, 1925-1994)の『急いで下りろ』(*Hurry on Down*, 1953)、キングスリー・エイミス(Kingsley Amis, 1922-1995)の『ラッキー・ジム』(*Lucky Jim*, 1954)、アイリス・マードック(Iris Murdoch, 1919-1999)の『網の中』(*Under the Net*, 1954)、ジョン・オズボーン(John Osborne, 1929-1994)の『怒りを込めて振り返れ』(*Look Back in Anger*, 1956)、コリン・ウィルソン(Colin Wilson, 1931-)の『アウトサイダー』(*Outsider*, 1956)、ジョン・ブレイン(John Braine, 1922-1986)の『年上の女』(*Room at the Top*, 1957)、アーノルド・ウェスカー(Arnold Wesker, 1932-)の『キッチン』(*The Kitchen*, 1957)、アラン・シリトー(Alan Sillitoe, 1928-2010)の『土曜の夜と日曜の朝』(*Saturday Night and Sunday Morning*, 1958)などが代表作に挙げられる。

この作品群において、主人公は地方都市の労働者階級や下層中産階級の「アンチ・ヒーロー」(anti-hero)

に設定されており、大英帝国へのノスタルジーや階級社会を温存する「エスタブリッシュメント」(the Establishment)に対するアンチテーゼとして、反抗的姿勢を示す。その特徴から、「怒れる若者たち」はイギリス文学史において、ピカレスク小説の系譜を継承する「ネオ・ピカレスク小説」(neo-picaresque novel)と位置づけられ、形式的にはモダニズムの否定とリアリズムへの回帰として語られてきた²。

ただし、「怒れる若者たち」という呼称自体には賛否両論があり、批評家からはメディアによって捏造された陳腐な宣伝文句に過ぎないと軽視され、当事者の作家たちも安易なラベリングに反発した。彼らが同時代性を反映していたことは否定できない事実であるが、多くの先行研究では、「怒れる若者たち」の反抗は自己中心的で情緒不安定な個人的感情であると結論づけられている。ほぼ同時期のアメリカに出現した「ビート・ジェネレーション」(Beat Generation)と比較されることもあるが³、「怒れる若者たち」は過小評価されているのが現状である。

² Walter Allen. *Tradition and Dream: The English and American Novel from the Twenties to Our Time*. London: Phoenix House, 1964. p. 279.

³ 1958年には、両者のアンソロジーも刊行された。Gene Feldman and Max Gartenberg. ed. *The Beat Generation and the Angry Young Men*. New York: Citadel P, 1958.

¹ 「怒れる若者」という表現は、レズリー・アレン・ポール(Leslie Allen Paul, 1905-1985)の自伝のタイトルに初出であるが、一般的には後述するオズボーンの戯曲名に由来する。Leslie Allen Paul. *Angry Young Man*. London: Faber and Faber, 1951.

本稿では、「怒れる若者たち」を一過性の社会現象として安易に一蹴するのではなく、当時の時代背景や社会状況を踏まえながら代表作を概観し、文芸批評の批判や評価を総括していく。近年、イギリスやアメリカにおいて、オズボーンの『怒りを込めて振り返れ』やウェスカの『キッチン』が再演されるなど、「怒れる若者たち」再評価の動向が顕著になっている。これは「怒れる若者たち」の1950年代と今日の状況に密接な関連性があるからに他ならない。そこで今一度、「怒れる若者たち」を取り上げ、現代社会における社会文化的意義を再考する。

2.時代背景

1950年代のイギリスは、歴史的に周縁化されてきた労働者階級や下層中産階級が「豊かな社会」⁴の到来によって社会のメインストリームに進出を果たした時代である。イギリス国民が1930年代の大量失業と飢餓、1940年代の戦争と耐乏生活という苦境を乗り越え、1950年代の物質的繁栄と自由を謳歌するに至るまでには、さまざまな紆余曲折があった。

第2次世界大戦に参戦したイギリスは、1945年の終戦以降、軍事的・経済的にアメリカとソ連に従属せざるを得ない状況に陥る。連合国側のイギリスにとって、第2次世界大戦は勝利に終わった戦争に違いないが、相次ぐ植民地の独立によって重要な財政基盤を失い、世界の支配的地位に終止符を打つ契機となった。また、イギリスの勝利がアメリカとソ連の支援体制によるものであった事実から、戦後の主導的地位を占めるのが両国であることは単に経済力からだけではなく、思想的潮流からも明白であった。アメリカとソ連は、それぞれ資本主義と共産主義という対極的な社会制度を取り、自国の思想を積極的に普及させようと模索していた。特に、1947年に発表されたアメリカの「マーシャル・プラン」(Marshall Plan)は、疲弊したヨーロッパ諸国の復興支援に貢献する反面で、アメリカの対外的影響力を強化するとともに、ソ連を中心とする共産主義勢力の拡大を牽制する意図があった。戦時中のイギリス首相で保守

党党首ウィンストン・チャーチル(Winston Churchill, 1874-1965)が退任後の1946年の演説で「鉄のカーテン」(an iron curtain)⁵と表現したこの冷戦時代の緊張状態において、イギリスには社会保障の行き届いた国家体制を目指す「第3の道」(the third way)という選択肢しか残されていなかったのである。

イギリス国内では、まだ戦雲の晴れやまぬうちに行われた1945年7月の戦後初の総選挙で、国民は戦後の国家運営をクレメント・アトリー(Clement Attlee, 1883-1967)率いる労働党政権に委ね、「福祉国家」(welfare state)への転換が図られた。その方針はすでに戦時中から構想されており、1942年のウィリアム・ベヴァリッジ(William Beveridge, 1879-1963)による「ベヴァリッジ報告書」(“Beveridge Report”, 1942)の提言に基づき、「ゆりかごから墓場まで」(from the cradle to the grave)をスローガンに掲げた福祉国家政策は、1951年の政権交代後も踏襲された。また、1944年にはジョン・メイナード・ケインズ(John Maynard Keynes, 1883-1946)の経済政策論に依拠した「雇用政策白書」(“White Paper on Employment Policy”, 1944)の発表、リチャード・オースティン・バトラー(Richard Austen Butler, 1902-1982)が先導した「1944年教育法」(The 1944 Education Act)の成立など、戦時中に戦後の方向性が決定づけられた。

その結果として、基幹産業の国有化、完全雇用の実現、所得の平準化、税負担の公平化、教育機会の均等化、住宅環境の整備、医療福祉の拡充といった劇的な社会的変化を遂げた。つまり、社会構造の変化に伴う経済成長によって、労働者階級や下層中産階級は労働条件の改善、賃金の上昇、生活水準の向上といった恩恵を受け、社会的進出が可能になったのである。この「豊かな社会」の実現は、1957年に当時のイギリス首相で保守党党首ハロルド・マクミラン(Harold Macmillan, 1894-1986)の“Most of our people have never had it so good.”⁶という演説に象徴されている。

⁴ John Kenneth Galbraith. *The Affluent Society*. Harmondsworth: Penguin, 1958. を参照。

⁵ Robert Rhodes James, ed. *Winston S. Churchill: His Complete Speeches, 1897-1963, Vol. 7, 1943-1949*. London: Chelsea House, 1974. p. 7290.

⁶ Peter Clarke. *Hope and Glory: Britain 1900-2000*. London: Penguin, 2004. p. 255.

しかしながら、安定期に入ったイギリスに大きなダメージを与えたのは、1956年のスエズ動乱とハンガリー事件という2つの国際紛争であった。スエズ動乱では、スエズ運河の国有化を宣言したエジプトに対して、イギリスは空爆侵攻を行ったが、その旧態依然とした帝国主義的態度が国際世論の集中砲火を浴び、完全撤退を余儀なくされた。また、ハンガリー事件では、ハンガリーの民主化を武力鎮圧したソ連に対して、武力介入を躊躇したイギリスは軍事力の弱体化を露呈し、国際的威信を失墜した。この1956年以降、大英帝国の解体プロセスは一気に加速していった。それは植民地時代の終焉を意味し、イギリスの衰退に拍車をかけることになった。

3. 怒りの理由

(1) 大義名分の喪失

このような時代背景の中、イギリス社会の自信喪失に時宜を合わせるように、既存の秩序や伝統に対する若い世代からの「怒り」が噴出した。1956年5月8日、ロンドンのロイヤル・コート劇場で上演された当時26歳の無名の劇作家オズボーンの戯曲『怒りを込めて振り返れ』の主人公ジミー・ポーター(Jimmy Porter)の激昂した叫びは、衝撃を持って迎えられた。

I suppose people of our generation aren't able to die for good causes any longer. We had all that done for us, in the thirties and the forties, when we were still kids. [...] There aren't any good, brave causes left. If the big bang does come, and we all get killed off, it won't be in aid of the old-fashioned, grand design. It'll just be for the Brave New - nothing - very - much - thank - you.⁷

労働者階級出身の25歳の青年ジミーは、戦後の地方に新設された「It's not ever red brick, but white tile」⁸を卒業後、定職に就かずに友人のクリフ(Cliff)と菓子屋を営んでいる。彼は中産階級出身のアリソン

(Alison)と結婚し、彼女への劣等感を心の中にくすぶらせながら社会への憤懣を滾らせる。ジミーはまさに戦後世代の若者と評され、イギリス社会の鬱屈した状況に対する若者の失望、不満、焦燥の象徴となった。そこには核戦争の脅威の下、生命を懸けてコミットすべきこと、絶対に守らなければならないものといった大義名分を喪失した世代の行き場のない怒りがあった。引用したジミーの台詞を歴史的事実に対応させると、それは見事に一致する。

The men of the thirties had proved themselves in the Spanish Civil War; the men of the forties had defeated Hitler. In the fifties, in a world cynically divided between the superpowers and immobilized by fear of atomic war, there were no brave causes left in which young men might fight to prove themselves.⁹

このように、危機と可能性を孕んだ時代には若者がその存在をかけて戦うに足りる大義名分があったが、1950年代は第3次世界大戦への不安や核兵器によって一瞬にして消滅させられてしまうことへの恐怖感が付き纏い、すべてが空虚で無意味に映るのである。実際、この新しい世代との関連では、イギリスが福祉国家として整備された1950年代の微温的な雰囲気とともに、若者の犯罪や暴動などアナーキックな言動が表出していた¹⁰。戦後の国家政策が下層階級の若者に恩恵を与えたことは事実であるが、それでも感謝するには程遠かった。むしろ若者にしてみれば、存在意義や存在証明を確立する大義名分の喪失こそ苛立たしかったのである。

(2) 大英帝国へのノスタルジー

また、『怒りを込めて振り返れ』に表れているのは、新世代の問題だけではない。アリソンの父親であるレッドファーン大佐(Colonel Redfern)はインドに勤

⁹ Alistair Davies. "Literature, Politics, and Society." in ed. Alan Sinfield. *Society and Literature: 1945-1970*. London: Methuen, 1983. p. 27.

¹⁰ 1950年代初頭から1950年代末期のロンドンには、エドワード(Edward)7世時代(1901~10年)のファッションを好んで着用したティーンエイジャーの不良少年が出現し、「テディ・ボーイ」(teddy boy)と呼ばれた。

⁷ John Osborne. *Look Back in Anger*. London: Penguin, 1982. pp. 84-85.

⁸ *Ibid.*, p. 42.

務した軍人で、ジミーに言わせると、“an old plant left over from the Edwardian Wilderness. And [...] can't understand why the sun isn't shining any more.”¹¹である。インドに向けて出発した1914年の黄金時代の英帝国こそ大佐の記憶するイギリスの姿であり、彼が指揮したインド陸軍が彼の世界であった。アリソンはジミーと大佐という新旧世代の対照的な関係について、“You're hurt because everything is changed. Jimmy is hurt because everything is the same. And neither of you can face it.”¹²と核心を突き、「ジェネレーション・ギャップ」(generation gap)の問題を浮上させる。ここで興味深い点は、世代間断絶を象徴する2人の間に互に通じ合うものがあることである。劇中、ジミーは大佐を何度も罵倒するが、その裏側にはまだ大義名分が存在していたエドワード朝とその時代をリアルタイムで生きた彼に対する羨望や憧憬が隠されているのである。

(3) 残存する階級社会

そして、再び現実に目を向ければ、福祉国家が成立したとはいえ、理想は極めて浅薄に実現されたに過ぎなかった。そればかりか、本質的には何も変わっていなかったのである。それは労働者階級の生活向上と中産階級の生活水準の相対的低下という量的変化をもたらしたにとどまり、社会の質的变化を意味するものではなかった。つまり、イギリスは平等主義を標榜しつつも、「2つの国民」(two nations)¹³という戦前との連続性を維持していたのである。1914年の第1次世界大戦以降の激動とそれにもかかわらず夢や理想だけが失われて一向に変わらない現実があるがゆえに、ジミーはそのギャップに苦悩して中産階級を激しく憎悪しているのである。このように、『怒りを込めて振り返れ』の成功の理由は、中産階級の観客がエドワード朝に対する郷愁に共感を示す一方、労働者階級の観客が根強い階級格差に対する怒りに共感したからであると言える。その意味で、ジョージ・オーウェル(George Orwell, 1903-1950)の

“England is the most class-ridden country under the sun.”¹⁴という指摘は、実に正鵠を射ている。

それまでのイギリス演劇界では、「社会」を取り上げるといっても、あくまでも「社交界」などの中産階級的な生活文化であり、作家も内容も観客もすべて中産階級が中心な「ウェルメイド・プレイ」(well-made play)であった¹⁵。1950年代に入り、社会の底辺で搾取・抑圧されてきた労働者階級の生活文化を反映した「社会劇」(social drama)が初めて上演されたのである。中産階級が独占していた演劇界に労働者階級の思考と感情を導入した点で、『怒りを込めて振り返れ』の演劇的な革新性は十分に評価できよう。

(4) アメリカの影響力

さらに、『怒りを込めて振り返れ』には、当時のアメリカの政治経済的・文化的影響力を示唆する場面がある。イギリスが衰退の一途を辿る一方で、アメリカは順調に世界的覇権を掌握しつつあった。ジミーは戦後の世界情勢について、次のように言及する。

I must be getting sentimental. But I must say it's pretty dreary living in the American Age - unless you're an American of course. Perhaps all our children will be Americans. That's a thought isn't it?¹⁶

ジミーはアメリカがイギリスに及ぼすさまざまな影響力を危惧しているが、これはイギリスの同時代人が共通して持っていた危機感である。それはすでに戦前から現れ始めていた兆候であったが、1950年代にますます顕著になり、J・B・プリーストリー(J.B. Priestley, 1894-1984)とジャケッタ・ホークス(Jacquetta Hawkes, 1910-1996)は『虹を下る』(Journey Down a Rainbow, 1957)において、次のように懸念している。

¹¹ *Look Back in Anger*. p. 83.

¹² *Ibid.*, p. 84.

¹³ Benjamin Disraeli. *Sybil: or The Two Nations*. Harmondsworth: Penguin, 1985. p. 96.

¹⁴ George Orwell. *The Lion and the Unicorn: Socialism and the English Genius*. London: Penguin, 1982. p. 52.

¹⁵ John Russell Taylor. *Anger and After: A Guide to the New British Drama*. London: Penguin, 1962. p. 14.

¹⁶ *Look Back in Anger*. p. 17.

We are already in another age, when America mostly pays the piper and calls for most of the tunes. There is no longer any point in leaving Leicester Square and Coventry Street in order to describe Broadway, which merely has more electric light, newer Hollywood films, larger cafeterias. English readers have not to be conducted across the Atlantic now to observe the American style of urban life: it can be discovered in the nearest town. It is now the great invader.¹⁷

また同様に、フランシス・ウィリアムズ(Francis Williams, 1903-1970)は『アメリカ人の侵入』(*The American Invasion*, 1962)において、次のように警鐘を鳴らす。

The impact of American ideas, and still more of American ways of life, is now so large, the drive of America to Americanise so great, that to ask how much of what is specifically English in our civilisation will remain in a decade or two if the trend continues is by no means absurd.¹⁸

さらに、文化変容の観点から、リチャード・ホガート(Richard Hoggart, 1918-)は『読み書き能力の効用』(*The Uses of Literacy*, 1957)において、伝統的な民衆文化(=ポピュラー・カルチャー)と大衆文化(=マス・カルチャー)とを区別し、イギリスの労働者階級がアメリカのマス・カルチャーを無批判に受容し、その生活文化が侵食され、独自のアイデンティティを喪失していく状況を憂慮した¹⁹。大量生産・大量消費型のアメリカ文化の氾濫によるイギリスの伝統的な民衆文化の侵食が顕在化したこの時代に、全世界的な文化グローバリゼーションの潮流を指摘することもできよう。

¹⁷ J.B. Priestley and Jacquetta Hawkes. *Journey Down a Rainbow*. London: Readers Union, 1957. p. 7.

¹⁸ Francis Williams. *The American Invasion*. New York: Crown, 1962. p. 11.

¹⁹ Richard Hoggart. *The Uses of Literacy: Aspects of Working Class Life*. New Brunswick: Transaction, 1998. p. 189-191.

4.漂流するアンチ・ヒーローたち

『怒りを込めて振り返れ』が発表された1956年前後から、その時代精神に呼応するかのよう、無数のアンチ・ヒーローたちが文学作品の主人公として登場するようになる。アンチ・ヒーローたちの発言や行動や価値観は、同時代の社会的変化を色濃く反映している。

(1)階級上昇

ブレインの『年上の女』は、労働者階級の主人公ジョー・ランプトン(Joe Lampton)が、階級社会に対する反抗心から、実業家で市会議員のブラウン(Brown)の若い娘スーザン(Susan)との結婚を踏み台にして富と権力を手に入れるために、労働者階級の年上の女性アリス(Alice)との愛を犠牲にする物語である。ブラウンがジョーの気概を試した後、“There’s always room at the top [...]”²⁰と彼を挑発する言葉は、同時代の「社会的流動性」(social mobility)に関して極めて示唆的である。そして、アリスはジョーに捨てられた夜に自殺し、スーザンを選んだジョーは上流社会での生活と引き換えに失ったものの大きさを知り、成功の苦汁を嘗める。

作品のタイトルが示すように、彼は社会の階段を自ら上昇して移動するイメージ、すなわち「労働者階級から中産階級への階級上昇」という立身出世を試みる。階級上昇について、アンソニー・バージェス(Anthony Burgess, 1917-1993)は、「怒れる若者たち」の男性主人公の特徴の1つとして「ハイパーガミー」(hypergamy)²¹を指摘している。また、ロビン・フォックス(Robin Fox, 1934-)は、階級間婚姻による社会移動後の他階級への同化の困難さを主張している²²。

²⁰ John Braine. *Room at the Top*. Harmondsworth: Penguin, 1959. p. 212.

²¹ 「ハイパーガミー」は、ヒンドゥー教徒の女性が自分と同等以上のカーストの男性と結婚する習慣を意味する人類学の専門用語であるが、バージェスは社会移動の手段としての階級間婚姻という意味に転用している。Anthony Burgess. *The Novel Now*. London: Faber and Faber, 1971. p. 143.

²² Robin Fox. *Encounter with Anthropology*. Harmondsworth: Penguin, 1975. p. 109.

(2)階級下降

ウェインの『急いで下りろ』は、主人公チャールズ・ラムリー(Charles Lumley)が自身の中産階級的属性に対する嫌悪感から、大学を卒業しても定職に就かず、窓ガラス拭き、陸送運転手、麻薬密輸入、病院の雑役夫、お抱え運転手、クラブの用心棒など労働者階級の職業を転々とするが、最終的にはラジオの喜劇脚本家に落ち着き、安定した生活を得るといふ物語である。

作品のタイトルが示すように、彼は社会の階段を自ら下降して移動するイメージ、すなわち中産階級から労働者階級への階級下降という脱体制的な志向を試みる。一見すると、それは責任回避のエゴイズムとも思えるが、最終的にチャールズは、“Neutrality; he had found it. The running fight between himself and society had ended in a draw;²³と「中立」に辿り着き、自身が反発していた社会と折り合いをつける。そこには自分の居場所を求め、人生への適応を模索する同時代の若者の新たなライフスタイルが例証されている。

(3)コミック・ノベル

エイミスの『ラッキー・ジム』は、下層中産階級出身の主人公ジェームズ・ディクソン(James Dixon)が奨学金を得て大学を卒業後、地方大学の歴史学の臨時講師の職を得る。彼はその不安定な地位を確立するために主任教授ウェルチ(Welch)の気を引こうと努力するが、中産階級のスノビズムに対する反抗心から衝動的に悪ふざけを繰り返し、失敗を重ねる。結末では、ジムが幸運にも安定した仕事と上流階級の女性を得るといふ喜劇性を持つ物語である。デイヴィッド ロッジ(David Lodge, 1935-)は、“The style of *Lucky Jim* introduced a new tone of voice into English fiction. It was educated but classless, eloquent but not conventionally elegant.”²⁴と述べ、コミック・ノベルの確立と高く評価している。

²³ John Wain. *Hurry on Down*. London: Penguin, 1960. p. 250.

²⁴ David Lodge. *The Art of Fiction: Illustrated from Classic and Modern Text*. London: Penguin, 1992. p. 111.

(4) 実存主義的思考

マードックの『網の中』は、主人公ジェイク・ドナヒュー(Jake Donaghue)が下請け翻訳業で細々と生活していたが、下宿を追い出されて放浪先のロンドンとパリで数々の奇想天外な事件を経験するという物語である。マードック作品の若者像が風俗的な興味に終わっていないのは、人間存在にかかわる実存主義哲学の問題を小説という形式で追求しようと試みているからである。それは過去にマードックがオックスフォード大学の特別研究員として勤務し、『サルトルーロマン的合理主義者-』(*Sartre: Romantic Rationalist*, 1953)という著書を発表している経緯からも明白である。

また、ウィルソンの『アウトサイダー』は、アウトサイダーの復権と自己実現を説く膨大な資料と分析の評論である。弱冠 25 歳の労働者階級出身の青年がほとんど独学で得た博覧強記ぶりも手伝って大きな話題を呼んだ。ウィルソンは実存主義哲学を起点としながら、殺人、オカルト、心理学などにも造詣が深く、独自の思想から幅広い分野で活躍した。

(5)労働者階級の視点

ウェスカーの戯曲『キッチン』は、ドイツ人青年の主人公ピーター(Peter)を中心に、30 人以上の多国籍の従業員が忙しく働くロンドンのレストランの調理場で繰り広げられる人間模様を描いた作品である。ロンドンのイースト・エンドのユダヤ系移民の労働者階級であったウェスカー自身の経験をモデルにしており、その舞台設定から「キッチン・シンク・ドラマ」(kitchen-sink drama)と称された。また、ウェスカーは鋭敏な政治意識から、労働組合の支援を得て芸術の大衆化を目指す組織「センター42」(Centre 42)を 1962 年に結成し、1970 年まで活動した。

シリトーの『土曜の夜と日曜の朝』は、労働者階級の主人公アーサー・シートン(Arthur Seaton)の刹那的で享乐的な生活が語られる。「やつら」(them)と「おれたち」(us)という階級的二項対立²⁵を意識しつつ、工場労働、飲酒、暴力、フットボール、性的放縦と

²⁵ *The Uses of Literacy: Aspects of Working Class Life*. p. 48.

いったシリトー自身の経験に裏打ちされた労働者階級の生活を内側から描いた作品である。なお、『土曜の夜と日曜の朝』は作家クラブ賞を、次作の『長距離走者の孤独』(*The Loneliness of the Long-Distance Runner*, 1959)はホーソンデン賞を受賞した。

(6)大衆の反応

メディアは一連の作家たちを、オズボーンの『怒りを込めて振り返れ』から命名し、「怒れる若者たち」と総称した。この流れは大きな社会現象として脚光を浴び、彼らは一躍時代の寵児となった。「怒れる若者たち」の成功は、若い才能を待望していた当時の停滞感を反映していたと言えよう。イギリスでは、戦後の改革によって経済的に安定した結果、現状を維持しようとする保守主義の傾向が強まった。よって、労働党に代わって保守党支持者が増加し、二大政党制の基盤が揺らぎ、政治的対立構造は崩壊していった。そして、1951年にはチャーチル率いる保守党が政権を奪還することになる。「エスタブリッシュメント」の温床であった保守党の国家運営によって大英帝国の幻影が復活し、再び猛威を振るい始めたのである。

キングスリー・マーティン(Kingsley Martin, 1897-1969)は「エスタブリッシュメント」について、次のように解説する。

Probably the best definition of the Establishment is that it is that part of our government that has not been subjected to democratic control. It is the combined influence of persons who play a part in public life, though they have not been appointed on any public test of merit or election. More important still, they are not subject to dismissal by democratic process. They uphold a tradition and form a core of continuity in our institutions. They are privileged persons and their positions are not as a rule affected by changes of government.²⁶

²⁶ Kingsley Martin. *The Crown and the Establishment*, London: Hutchinson, 1962. pp. 84-85.

「エスタブリッシュメント」の復活を受けて、ウェインは『若き世代の発言』(*Declaration*, 1957)に寄稿したエッセイ「綱渡りの途中」(“Along the Tightrope”)において、次のように糾弾する。

Strangest of all was the attitude of people who had been young in the twenties, and were now getting into middle age. In their youth, it had seemed that the rigid crust of conventional life was cracking from top to bottom; a few more hopes punched in it, and it would be nothing but a heap of crumbs. And behold! Everything had somehow drifted back into something like the old shape; things like marriage, and private property, and war, and the division of the world into nations, and the Church, and the public schools - there they all were, the same as ever!²⁷

つまり、福祉国家が社会的緊張と階級的対立の緩和を図ったことによって、逆説的に「エスタブリッシュメント」の維持と安定強化の手段として機能したのである。福祉国家が支配体制に組み込まれて定着したことで時代の流れは停滞し、若者はその閉塞感に未来への展望を見出せず、怒りを覚えるようになった。「怒れる若者たち」はその民意を代弁し、大衆はその新しい動きをいち早く歓迎したのである。「怒れる若者たち」や左翼知識人とその怒りを共有した大衆の反応は、「核武装反対運動」(Campaign for Nuclear Disarmament = CND)や「ニューレフト運動」(the New Left)といった政治的コミットメントと連動して一時的に活況したが、次第にそれも沈静化していった。

5. 「怒れる若者たち」への否定的評価

「怒れる若者たち」という呼称自体には賛否両論があったが、同時代には早くも1958年の時点で「怒れる若者たち」現象を受け、ケニス・アルソップ(Kenneth Allsop, 1920-1973)による最初の研究書『怒りの10年』(*The Angry Decade: A Survey of the Cultural*

²⁷ John Wain. “Along the Tightrope.” in ed. Tom Maschler. *Declaration*. London: MacGibbon & Kee, 1957. p. 94.

Revolt of the Nineteen-Fifties, 1958)が出版されている²⁸。同書は同時代人が観察した記録として価値があるだけでなく、鋭い指摘も散見される。その一方で、1958年という早い段階で出版された点から、「怒れる若者たち」をそれほど重要ではない単なる一過性の社会現象とみなす根拠にもなった。

また、ハリー・リチャー(Harry Ritchie, 1958-)は『サクセス・ストーリーズ』(*Success Stories: Literature and the Media in England 1950-1959*, 1988)において、「怒れる若者たち」に対してさらに手厳しい見解を取っている。リチャーはアルソップの著書について、『怒りの10年』というよりも『怒りの18ヶ月』とした方が年代的により正確なタイトルになったであろうと批判し、アルソップが著作に着手したのは1957年の秋であり、それはその頃までには「怒れる若者たち」の成果を要約できると判断していたことを示す証拠であると述べている²⁹。続けて、リチャーは1950年代のもう1つの文学的動向である「ムーヴメント」(the Movement)と「怒れる若者たち」に関する文献を精査した後、「ムーヴメント」を文学運動として捉えることにはそれなりの意味があるが、「怒れる若者たち」についてはその呼称や概念も全く無意味であるとし、「怒れる若者たち」現象を“invented by the media”と結論づけている³⁰。

このメディアによる捏造劇の本質は、ハワード・S・ベッカー(Howard S. Becker, 1928-)の「ラベリング理論」(labeling theory)を援用すれば、容易に理解できる。

Social groups create deviance by making the rules whose infraction constitutes deviance, and by applying those rules to particular people and labeling them as outsiders.³¹

²⁸ Kenneth Allsop. *The Angry Decade: A Survey of the Cultural Revolt of the Nineteen-Fifties*. London: Peter Owen, 1958. を参照。

²⁹ Harry Ritchie. *Success Stories: Literature and the Media in England 1950-1959*. London: Faber, 1988. p. 47.

³⁰ Ibid., pp. 206-207.

³¹ Howard S. Becker. *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*. New York: The Free P. p. 9.

要するに、メディアは反抗的姿勢を示す若い作家たちを手当たり次第に寄せ集め、「怒れる若者たち」というラベリングを行ったのである。その最たる例は、1957年にトム・マシュラー(Tom Maschler, 1933-)が企画・編集したオズボーンやウェインなど8人の作家のエッセイ集『若き世代の発言』の出版であり、「怒れる若者たち」現象を助長する決定打となった。新聞や雑誌も続々と「怒れる若者たち」の特集記事を組んで扇動し、彼らに高額報酬で寄稿を依頼した。かくして、「怒れる若者たち」はメディアによって1つのグループとして捏造された。そして、ラベリングされた商品として完全に商業化され、市場に流通して消費・受容されてしまったのである。

ところが、フレデリック・カール(Frederick Karl, 1927-2004)がその呼称について、“an artificial tag from which the writer cannot escape”³²と指摘しているように、怒りの理由こそ違うものの、彼らの作品の主人公には何らかの形で「エスタブリッシュメント」への批判的態度や反抗の色調が明確に認められるので、どの作家にしても「怒れる若者たち」と呼ばれることを否定できない結果となっているのである。しかしながら、実際に彼らは同じ主義主張を共有していたわけではなく、互いに敵視していた者もあり、彼らの大半が「怒れる若者たち」という呼称で呼ばれ、同じ枠組みの中で同列に扱われることを拒絶している。例えば、ウェインは自伝『快調に走る』(*Sprightly Running*, 1962)において、次のように非難している。

I reject the label, and will always continue to reject it, because (i) it is the creation of journalists who know nothing, and care less than nothing, for the art to which my life is dedicated, (ii) it is a hindrance to anyone who holds serious opinions and is able to be genuinely serious about them, and (iii) because I refuse to be institutionalized, whatever may be the immediate advantages in terms of hard cash.³³

³² Frederick Karl. *A Reader's Guide to the Contemporary English Novel*. London: Thames and Hudson, 1963. p. 220.

³³ John Wain. *Sprightly Running: Part of an Autobiography*. London: Macmillan, 1962. p. 225.

確かにウェインの反論にも一理あり、この呼称が彼らに共通する特徴を上手く表現しているかどうかという、直ちに異論が出てくる。例えば、カールはオズボーン、ウェイン、エイミス、ブレインの作品を要約し、次のように批判している。

Narrow range, superficial analyses, irresponsible and aimless protagonists, anti-heroic acts, anti-intellectualism, slapstick comedy - these are the qualities suggested by these novelists of the 1950's.³⁴

また、バージェスもカールと一致する見解を述べている。

One of the most compelling literary phenomena of our time has been the emergence of the small good-hearted rebel, too feeble to make his protest against society seem more than a clown's gesture, not even articulate enough to clarify for himself what precisely is wrong with society, except that it is full of humbug.³⁵

この2人の同時代人の批判の前提には、戦後イギリスの福祉国家という特殊な環境において、1950年代の作家たちは「怒れる若者たち」と呼ばれているものの、彼ら自身もその主人公たちも実際のところは決して怒っていないという認識があったのではないだろうか。これはアルソップが、彼らを大多数の人間の感情や意見に異を唱える「不同意者」(dissentient)と呼び、支配体制に反対する従来の組織的な「反対者」(dissenter)と区別していることも同じ理由のように思われる³⁶。

これらの認識は1950年代から時を経ても変わっておらず、ランダル・スティーブンソン(Randall Stevenson, 1954-)は、1950年代以降のイギリス文学の展開を概観しながら、「怒れる若者たち」の特徴を

挙げ、次のように批判している。

[...] the angry young men are seldom genuinely critical of the forces shaping contemporary life: their 'dissentience' seems little more than irritation at their exclusion from a satisfactory place in a society that had 'never had it so good.' In the case of Amis and Braine in particular, personal success largely terminated dissentience, just as their characters' rebellions are quickly annulled by the acquisition of a job and a place in the world.³⁷

総じて、「怒れる若者たち」の反抗は、落ち着く前の一騒動のように感じられるところがある。ここで引用した批評家たちの批判は、「怒れる若者たち」を代表するオズボーン、ウェイン、エイミス、ブレインに向けられているが、マードックとウィルソン、ウェスカーとシリトーに対する反応は鈍い。マードックとウィルソンの場合は、実存主義哲学に傾倒していたので、方向性の相違から言及していないのであろう。ウェスカーとシリトーの場合は、彼らの怒りの質が他の作家たちとは異なっていたからであろう。エイミスとウェインは中産階級出身であり、ほぼ同時期にオックスフォード大学で教育を受け、それぞれスウォンジー大学とレディング大学といった「赤レンガ大学」でイギリス文学の教鞭を執る「新大学才人」(The New University Wits)であり、「ムーヴメント」の中心的存在でもあった。また、オズボーンとブレインは下層中産階級出身であるが、「奨学金少年」(scholarship boy)としてそれぞれ大学とグラマラー・スクールに進学している。それに対して、戦前の労働者階級の大半がそうであったように、ウェスカーとシリトーは高等教育を一切受けていない。このような経歴的相違が、それぞれの作品の怒りの質的な差異となって表れていると言える。シリトーやウェスカーの反抗は、階級社会の底辺で生きる労働者階級の生活感情から滲み出た根源的な怒りなのである。

³⁴ *A Reader's Guide to the Contemporary English Novel*. p. 220.

³⁵ *The Novel Now*. p. 142.

³⁶ *The Angry Decade: A Survey of the Cultural Revolt of the Nineteen-Fifties*. p. 9.

³⁷ Randall Stevenson. *The British Novel Since the Thirties: An Introduction*. London: B.T. Batsford, 1986. p. 129.

このような怒りの質的な差異は、その後の「怒れる若者たち」の変化にも見て取れる。確かに「怒れる若者たち」は「エスタブリッシュメント」に反抗したが、その反抗も社会から冷遇されているがゆえの反抗であり、その証拠に彼らの怒りが売れ行きのいいヒット商品となって彼らに商業的成功と社会的地位をもたらすにつれて、反抗の素振りも小さくなっていった。その後、ウェインとエイミスが伝統を重んじる保守主義者へと転向していくのを見ると、「怒れる若者たち」の本質が理解できるであろう。1960年代に入り、次第に怒りを失ったウェインとエイミスに対して、シリトーは1965年発表の『ウィリアム・ポスターズの死』(*The Death of William Posters*, 1965)において、“A book [...] called *Hurry on Jim* by Kingsley Wain that started by someone with eighteen pints and fifteen whiskies in him falling downstairs on his way to the top.”³⁸と揶揄しており、時間とともに「エスタブリッシュメント」に迎合していった観念的な左翼作家たちを批判している。

また、一方で「怒れる若者たち」像が世間に広まるにつれて、彼らの存在を伝統的な秩序の嘆かわしい崩壊として捉える旧世代からは厳しい批判もあった。例えば、上流階級出身の作家サマセット・モーム(*Somerset Maugham*, 1874-1965)は、1955年にエイミスの『ラッキー・ジム』がサマセット・モーム賞を受賞した際、次のように吐き捨てた。

They do not go to university to acquire culture, but to get a job, and when they have got one, scamp it. [...] Their idea of a celebration is to go into a public house and drink six beers. They are mean, malicious and envious. [...] They are scum.³⁹

モームの批判には、イギリスにおける「階級」と「教育」の問題が垣間見える。階級と教育は表裏一体の関係にあり、特に後者は「エスタブリッシュメント」の維持装置として今日も機能している。「怒れる若者

たち」が同時代や以降の文芸批評において、過小評価されてきた理由もまさに階級と教育に起因する。

6. イギリスにおける階級と教育

イギリスは文学の長い伝統を持つ国であるが、作家業は概ね良家の出身で、イートンやハーロウといったパブリック・スクールの伝統校からオックスフォードやケンブリッジといった名門大学を卒業した財産も教養もある紳士の生業であり、その主題も中産階級を扱ったものが中心的であった。首都ロンドンを中心とし、中産階級出身者以上に偏ったイギリス文学界において、第2次世界大戦後の1950年代に地方の労働者階級や下層中産階級出身であるが、教育制度改革の恩恵によって「奨学金少年」として高等教育を受けた「怒れる若者たち」をはじめとする作家やレイモンド・ウィリアムズ(*Raymond Williams*, 1921-1988)やリチャード・ホガートといったイギリスを代表する知識人が出現し、地方の下層階級の生活や文化を主題にした作品や研究を発表し始めたことは特筆すべき社会文化現象であると言えよう。

この変化は第2次世界大戦の影響で文学活動があまり活発ではなかった1940年代を除いても、1920年代のケンブリッジ大学のキングズ・カレッジでの交友関係から形成された「ブルームズベリー・グループ」(*Bloomsbury Group*)や1930年代のオックスフォード大学のクライスト・チャーチ・カレッジでの学生活動から派生した「オーデン・グループ」(*Auden Group*)に主導されてきたイギリス文学史を振り返ると、隔世の感がある。前者の中心人物であるヴァージニア・ウルフ(*Virginia Woolf*, 1882-1941)は、イギリス文学史を概観し、労働者階級出身作家の文学的評価について、次のように述べている。

Take away all that the working class has given to English literature and that literature would scarcely suffer; take away all that the educated class has given, and English literature would scarcely exist.⁴⁰

³⁸ Alan Sillitoe. *The Death of William Posters*. London: Macmillan, 1969. p. 166.

³⁹ Humphrey Carpenter. *The Angry Young Men: A Literary Comedy of the 1950s*. London: Penguin, 2003. p. 77.

⁴⁰ Virginia Woolf. “The Leaning Tower.” *The Moment and Other Essays*. London: The Hogarth, 1952. p. 112.

また、後者の中心人物であるスティーブン・スペンダー(Stephen Spender, 1909-1995)が、1950年代の文化現象に対して、“a rebellion of the Lower Middle Brows”や“new provincial Puritanism”といった揶揄的な表現⁴¹をしていることから、それをイギリス文学界の伝統的な知的諸傾向への反動として捉えており、彼がウルフと同様の見解を持っていたことが窺い知れる。

これらの文芸批評からも理解できるように、それまでのイギリス文学の波動的な形成過程に「階級」と「教育」が決定的な影響を及ぼしてきたことは周知の事実であり、イギリス文学界は中産階級出身のハイブラウだけに許される聖域であったと言える。よって、「文学的正典」(cannon)の対象も自動的に中産階級的観点に限定されてくる。それゆえに労働者階級や下層中産階級出身のロウブラウは、異端児扱いや過小評価を受けるのである。このオックスブリッジ的文化価値の体系はイギリス社会の縮図であり、階級と教育を出発点として、<上流階級・中産階級/労働者階級>、<中心/周縁>、<上位/下位>、<高級/低俗>、<都市/地方>という二項対立的構図の強化によって「文化的再生産」(Cultural Reproduction)⁴²のメカニズムが機能し、階級社会が維持されているのである。

7. 「怒れる若者たち」への肯定的評価

前述したように、「怒れる若者たち」に対して否定的評価が多い中、肯定的評価も少数派ながら存在している。ロバート・ヒューイソン(Robert Hewison,

1943-)は『怒り』(*In Anger: Culture in the Cold War 1945-60*, 1981)において、“The Angry Young Man is a myth, [...] Angry Young Man was a compelling slogan.”⁴³と「怒れる若者たち」の短命さを指摘しつつ、その社会文化的意義を認めている。ヒューイソンは1956年を、“first moment of history after the Second World War about which there is anything like a persistent myth”と位置づけ、1956年以後の大きな文化的な方向転換を“combination of historical truths and popular distortion”と解釈し、結論として「ムーヴメント」とともに「怒れる若者たち」を1960年代の文化革命の先駆者という捉え方をしている⁴⁴。

また、「怒れる若者たち」の中で数少なくなった当事者の1人であるウィルソンは、ハンフリー・カーペンター(Humphrey Carpenter, 1946-2005)が『怒れる若者たち』(*The Angry Young Men: A Literary Comedy of the 1950s*, 2002)において、「怒れる若者たち」を過小評価し、1960年代の前座となった喜劇の一コマと一定の肯定的評価は与えたものの⁴⁵、真剣に議論する価値はないと一蹴したことに反論し、2007年に『怒りの歲月』(*The Angry Years: The Rise and Fall of the Angry Young Men*, 2007)を発表した。ウィルソンの主張は、1950年代の「怒れる若者たち」の活躍によって文化的土壌が形成されたからこそ、1960年代にさまざまな文化活動が発展していったというものである⁴⁶。また同様の観点から、アーサー・マーウィック(Arthur Marwick, 1936-2006)は『1960年代』(*The Sixties: Cultural Revolution in Britain, France, Italy, and the United States, c.1958-c.1974*, 1998)において、1958年から1963年までを“the first stirrings of a cultural revolution”と位置づけ⁴⁷、同時代の歴史的な重要性を強調している。

⁴¹ William Van O'Connor. *The New University Wits and the End of Modernism*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1963. p. 4.

⁴² ピエール・ブルデュー(Pierre Bourdieu, 1930-2002)は、『ディスタクシオン—社会的判断力批判—』(*Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*, 1979)において、階級構造を詳細に分析し、個人の社会階級の位置は従来の経済資本だけでなく、個人が持つ「文化資本」や個人の帰属する階級や集団に固有の知覚、評価、判断、行動図式の体系「ハビトゥス」によって規定されることを統計的に証明し、文化を介した社会的再生産を指摘した。Pierre Bourdieu. *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*. Trans. Richard Nice. Cambridge: Harvard UP, 1984. を参照。

⁴³ Robert Hewison, *In Anger: Culture in the Cold War 1945-60*. London: Weidenfeld & Nicolson, 1981. p. 130.

⁴⁴ *Ibid.*, pp. 141-148.

⁴⁵ *The Angry Young Men: A Literary Comedy of the 1950s*. p. 208

⁴⁶ Colin Wilson. *The Angry Years: The Rise and Fall of the Angry Young Men*. London: Robson, 2007. pp. 15-20.

⁴⁷ Arthur Marwick. *The Sixties: Cultural Revolution in Britain, France, Italy, and the United States, c.1958-c.1974*. New York: Oxford UP, 1998. を参照。

8.むすび

以上のように、「怒れる若者たち」現象については、その短命さから否定的評価が多くを占める一方で、1960年代の文化革命の萌芽としてその存在意義に肯定的評価も指摘されている。彼らは同時代のさまざまな問題意識から必然的に声を上げたが、その同時代性をメディアによって利用され、捏造された安易なラベリングで商業化されてしまった。しかしながら、「怒れる若者たち」の多様性は十把一絡げに類型化はできない、まさに十人十色の才能と表現力であった。特に労働者階級や下層中産階級の社会文化的進出という点で、極めて重要な社会文化的意義があると言える。

この1950年代の「怒れる若者たち」の出現を1960年代の世界的な文化革命「スウィングング・ロンドン」(Swinging London)への萌芽となった社会的ターニング・ポイントとして位置づけることは決して不可能ではないだろう。それは「怒れる若者たち」の作品群が出版されてベストセラーになった後、続々と映画化され、「ブリティッシュ・ニュー・ウェイヴ」(British New Wave)⁴⁸として新たな文化へ連動的に波及していった経緯からも明白である。したがって、「怒れる若者たち」は1950年代のイギリス社会が内包していた残滓的な閉鎖性と萌芽的な可能性を提示して、20世紀最大の文化革命への扉を開いた社会文化的地殻変動に他ならないのである。

(Received:December 31,2011)

(Issued in internet Edition:February 8,2012)

⁴⁸ 1950年代末期から1960年代初頭にかけてイギリスで隆盛した労働者階級に焦点を当てた映画。トニー・リチャードソン(Tony Richardson, 1928-1991)監督作品には、『怒りを込めて振り返れ』(1958)や『長距離走者の孤独』(1962)がある。カレル・ライス(Karel Reisz, 1926-2002)監督作品には、『土曜の夜と日曜の朝』(1960)がある。ジャック・クレイトン(Jack Clayton, 1921-1995)監督作品には『年上の女』(1959)がある。